様式3

令 和 ５ 年 度　自 己 評 価 表

鳥取県立岩美高等学校

中長期目標（学校ビジョン）	岩美高生としての誇りと自覚を持ち、何事にも「誠実」に対応でき、他者と「協働」して物事に取り組み、夢に向かって「果敢」に挑戦する人間を育成する。

今年度の重点目標	1　「学力」＝「学ぶ力」の向上と進路実現 2　「人間性」の育成 3　地域と連携した学校つくりと魅力化

年度当初				評価結果（９）月		
評価項目	評価の具体項目	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 「学力」＝「学ぶ力」の向上と進路実現	学力の向上と学習習慣の確立	・学校評価アンケートの「学力の向上感」に係る問いに対する肯定的な回答の割合が保護者・生徒ともに80%以上。 ・1、2年生基礎力診断テスト(12月)において、ＤＳゾーンの生徒数が年度始めから50%以上減少している。 ・学校評価アンケートの「一人一人を大切にしたわかりやすい授業」に対する保護者の肯定的な回答の割合が80%以上。 ・「ＵＤを意識した教育活動を展開している」教職員の割合が80%以上。	・各教科で新1年生の現状の学力を適切に把握した上で、今年の生徒の実態に合うリスタート学習の取り組みを全体で共有し徹底を図る。 ・基礎力診断テストをはじめとする各テストにおいて、自己採点やテスト直し等の事後学習を各教科で丁寧に指導する。 ・ＵＤを意識した様々な学力層の生徒全員にとってわかりやすい授業を展開することで、学力層の底上げをはかる。 ・教科をまたいでの授業参観の機会をさらに増やし、全教員の授業改善の意識を高める。	・学校評価アンケート（７月）では「学力の向上感」に係る問いに対する肯定的な回答の割合は保護者71.9%、生徒76.5%であった。 ・基礎力診断テストは実施しているものの、生徒自身のＰＤＣＡサイクルの構築が進んでいるとはまだ言えない状況にあり、第２回の実施を含め取組方の検討が必要。 ・学校評価アンケートの「一人一人を大切にしたわかりやすい授業」に対する保護者の肯定的な回答の割合が71%であった。 ・学校評価アンケート（７月）ではUDを意識し板書の仕方を工夫していると答えた教職員は79%と高い状態を維持している。	C	・定期考査前などに低学力の生徒に補習を行うなど、個々の生徒への対応を大切にしていく。 ・第２回基礎力診断テストについては、結果を生徒に還元できるよう、職員の事後学習の機会を設定する。 ・校外研修会などで得た知識や手法を各教科内で共有すると同時に、授業参観の回数を増やし、きめの細かい指導を行っていることを保護者に伝わるように情報発信する。 ・校内巡視の際にいつでも授業に入り参観することで他の教員の白板の使い方を参考にするなど、UDの意識を高め、授業改善の意識を高める。
	生徒が主体的に取り組む授業の工夫	・学校評価アンケートの「授業では、自分の意見や考えを発表する機会が設けられている」に対する生徒の肯定的な回答の割合が90%以上。 ・「授業では、その時間のねらいがはっきりしており、先生が白板に書く内容もわかりやすい」に対する生徒の肯定的な回答の割合が90%以上。	・観点別評価を生かし、生徒に学習の振り返りを促すことで学習に対する意欲を向上させる。 ・「主体的に学習に取り組む態度」の評価のあり方を検証しつつ、「指導と評価の一体化」の観点からの学習指導の不断の点検を進める。	・学校評価アンケート（７月）では「授業では、自分の意見や考えを発表する機会が設けられている」に対する生徒の肯定的な回答の割合が88.6%と目標まであとわずかである。 ・学校評価アンケート（７月）では「授業では、その時間のねらいがはっきりしており、先生が白板に書く内容もわかりやすい」に対する生徒の肯定的な回答の割合は86.7%で高水準である。	B	・ICTを活用することで生徒が自分の意見を全体に共有させる場面を増やし、また全体の前でプレゼンテーションをする授業構成を推進する。 ・互見授業を推進し，生徒が能動的に取り組める授業デザインと評価について実践と研鑽を積む。
	「自らの将来について主体的に考える」キャリア教育の推進	・進路学習が生徒の実情に応じた適切な時期に行われ、生徒が進路実現に向けて主体的に行動している。 ・「自分の進路実現に向け、資料を集めるなどをして、進路を考えている」生徒の割合が80%以上。 ・第1志望での進路決定率95%。	・進路行事のねらいを明確にし、３年間を通した進路学習の流れの再構築を行う。 ・担任面談と進路専任面談により生徒の進路志望状況を正確に把握し、情報を共有することできめ細やかな進路指導を行う。 ・探究的な学習との往還を通して、自己の在り方生き方を考え具体的に行動を起こす契機となるよう抜本的な進路行事の精選・再編成を進める。	・進路行事の見直しを進め、各行事の関連を重視した３年間のイメージ図を作成。 ・３年生については進路志望調査実施後に担任・専任双方で面談を行い、情報を共有することで個に応じた進路指導ができている。 ・学校評価アンケート（７月）では「自分の進路実現に向け、資料を集めるなどをして、進路を考えている」生徒の割合が64.5%であった。 ・総合的な探究の時間で生徒は自分の興味がある分野に分かれ、その問題を仲間と協働的に深く調べることで課題を解決する活動をしている。	C	・進路行事については実施時期にまだ検討が必要なものがあるため、さらに改良が必要。 ・２年生の進路志望調査についても担任・専任双方で面談を行い、早い時期から進路意識を高めさせていく。 **・総合的な探究の時間を通じて、探究心を育成し、自己の在り方生き方を考え具体的に行動を起こすようにする。また、フィールドワークなど地域に出向いて課題を見つけることを推奨する。**
2 「人間性」の育成	学校教育活動を通した基本的生活習慣とマナーの確立	・頭髪服装指導において再検査を受けなければならない生徒が10%以下になっている。 ・挨拶、返事、頭髪服装等の基本的生活態度が良好な状態が維持され、生徒の肯定的自己評価が90%以上、職員の肯定的評価が90%以上となっている。	・３年時に限らず進学・就職時の面接試験の場面を意識した進路指導（生徒指導）を行う。 ・生活指導において日常的な学年指導・教科指導と定期的な全校指導を充実させる。 ・指導部ノートを有効活用し、教職員の間での情報共有を進め、組織的な指導につなげる。 ・生徒、保護者に指導状況を丁寧に説明するとともに適時な連携による指導を徹底する。	・頭髪服装検査で再検査となる生徒数は例年並み。各学年でのきめ細やかな指導成果である。 ・軽微な生徒指導上の問題を許容し、指導のチャンスを逃している場面がある。 ・学校評価アンケート（７月）では「服装や頭髪などの校則を守り、日常生活でもマナーを守るように心がけている」と回答した生徒が95.8%と生徒の肯定的自己評価は目標値を大きく超えており、校則やマナーの厳守、挨拶や返事に関する意識は高い。	C	・引き続き細かな生徒指導を徹底する。 ・職員間で共通認識を行い、見逃さない指導を徹底する。 ・生徒、保護者に指導状況を丁寧に説明するとともに適時な連携による指導を徹底する。
	部活動を振興し、健康で心身のバランスのとれた人間の育成	・全生徒が部活動に加入している状態が継続している。 ・部活動に対する満足度が高く、忍耐力、礼儀、自己肯定感が向上している。 ・「部活動は社会人としての力を身につけるのにも役立っていると思う」と回答する生徒の割合が90%以上。	・部活動指導計画に基づいた適切な運営をとおし、技術向上のみならず人間的な成長を支援する。 ・本校の実態及び将来像に即した部活動の精選を進める。	・１０月１日現在、部活動に加入していない生徒は若干名いる。 ・部活動に真面目に取り組んでいる生徒も多く、部活動を通して礼儀、マナー、忍耐力等が身に付いていると認識している生徒も増えている。 ・学校評価アンケート（７月）では「部活動は社会人としての力を身につけるのにも役立っていると思う」と回答した生徒の割合は90.4%で目標値を超えている。	C	・部活動をやめた生徒に対して教育相談係を通じて担任が個人面談や保護者懇談をなどを行い、他の部活動への再加入を勧める。 ・引き続き生徒が部活動を通じて学校生活を充実させ、自己肯定感を高められるように部長会や全校集会等のあらゆる機会を通して部活動に係る取組についての啓発活動を行う。
	多様な生徒を理解し一人ひとりの自己有用感の伸長	・学校が、生徒にとって安心で安全な場所になっている。 ・「学校が安心安全な場所である」と回答する生徒の割合が70%以上。 ・ＳＮＳの利用に係るマナーやモラルを守ることができている。 ・「携帯・スマートフォンの学校外での使用時間が多くならないようにしている」生徒の割合が75%以上。 ・周囲に配慮した言動ができるようになっている。 ・生徒一人ひとりが自己実現を目指し、あらゆる教育活動の中で生き生きと活動している。 ・岩美高版ＵＤを意識して効果的な指導・支援に取り組む教員の割合が80%以上。	・情報モラル講演会等を早期に実施するとともに、全校集会・学年集会・ＨＲ等、あらゆる機会を通じて、ＳＮＳの危険性について啓発活動を徹底する。 ・生徒観察及びアセスメントを特別支援教育支援員と連携して実施し、必要に応じて個人面談や個別学習指導を実施する。 ・学年を中心としたケース会議の開催や保護者や関係機関との連携により、効果的な指導・支援につなげる。 ・「教育相談だより」の発行や面談を通した働きかけにより、生徒の自己理解・他者理解を深め、自己有用感を高めるためのヒントを伝える。	・令和４年度生活満足度調査（５月）の結果では、「学校が安心安全な場所である」と回答した生徒は58.0%。また、「学校の日常生活で困っていることがある」と回答した生徒が14.2%、「学習面で困っていることがある」と回答した生徒が26.7%であった。 ・情報モラルの意識も高くなっているが、使用時間に対しての意識が高まっていない生徒がいる。 **・学校評価アンケート（７月）では「携帯・スマートフォンの学校外での使用時間が多くならないようにしている」と回答した生徒の割合は67.5%であった。** **・学校評価アンケート（７月）では授業ではUDを意識し板書の工夫をしている教員は79%でほぼ目標値に達している。**	C	・生徒理解のための取組として、引き続きｈｙｐｅｒ-ＱＵ研修会を行い、SCとの対話的なケーススタディをとおして多面的な生徒理解及び多様な対応・指導について検討する。 **・ホームルームや全校集会等のあらゆる機会を通して情報モラルに対しての啓発活動を行う。** **・生徒と教員向けにスマートフォンなどのメディアの功罪を指摘する講演会を行うと同時に、保健便りなどを通じて保護者に対しても家庭での生徒の生活について管理してもらうよう促す。** **・外部専門機関との連携をより深め、教職員間で情報を共有し生徒理解に繋げる。** **・すべての生徒が学習内容を理解できる授業及び岩美高版UDを意識した授業実践および生徒の実態を踏まえた指導上の工夫を継続的に行う。**

様式３

	類型制の発展等も含めた「岩美高校の在り方」構築	・各類型の学習内容の魅力が効果的に発信でき、積極的に地域との交流が図れている。 ・高校が地域の方に誇りを持ってもらえるような存在になっている。 ・地域コミュニティの拠点となっている。	・進路志望を意識した類型選択となるよう、各進路行事を構築する。 ・学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を有効に活用し、具体的な地域学校協働活動に着手する。 ・「岩美高校あり方検討委員会」を継続するとともに、議論内容を教職員間で随時共有し、「中学生が行きたくなる学校づくり」を実現するための具体策について検討する。	・類型選択調査説明会を教務部・進路指導部共催で行い、進路を見据えた選択が出来るよう心がけた。 ・岩美高校魅力化CDの力を借り学校紹介アグレッシブビデオや学校案内用パンフレットのデザインをリニューアルし、管理職が中心となって県内外の中学校において積極的な広報活動を行っている。 ・生徒の生き生きとした学校生活の様子を画像とともに学校ＨＰでこまめに報告するとともに、県教育委員会公式ツイッターにも随時投稿し、発信している。 ・「岩美高校あり方検討委員会」で、学級減に対応した教育課程について具体的な検討が進行中である。	B	・新類型のあり方については職員間でより明確な共通認識が必要。 ・学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を有効に活用し、具体的な地域学校協働活動に着手する。 ・「岩美高校あり方検討委員会」を継続するとともに、議論内容を教職員間で随時共有し、「中学生が行きたくなる学校づくり」を実現するための具体策についてさらに検討する。 ・岩美高校魅力化CDの力を借りて生徒の自主的な地域貢献活動や公営塾、部活動の取組等について全国紙、地方紙で記事化され本校教育活動の地域認知度が高まるように情報発信をさらに進めていく。
３　地域と連携した学校つくりと魅力化	地域探究型学習（イワッツミッション）の発展・充実	・ワーキンググループで出た意見を指導案として提示し、担当教員に具体的に示すことができている。 ・ワーキンググループ内で仕事を分担し、各学年でのクリエイティブな議論につながっている。 ・「地域に貢献したい」と思う生徒の割合が90%以上。 ・「地域と連携し、地域に貢献する活動が生徒の人間力の育成に効果を上げている」と回答する教職員の割合が90%以上。	・職員会議の後に探究学習学年別担当者打合会を持ち、担当者での意見交換を通して学習指導のプランを協働して作り上げる。 ・資料や意見をGoogleClassroomを活用して会議の場以外でも適宜共有し、プランのブラッシュアップを図る。 ・ＩＣＴを効果的に活用して、生徒の成果物を蓄積し、生徒が学びを振り返るしくみを充実させる。 ・岩美高校魅力化コーディネーターの配置を地域資源の有効な活用による内容の深化・拡充につなげる。	・職員会議の後に探究学習学年別担当者打合会を持ち、ワーキンググループで議論した案を紹介したり、各担当者同士で意見交換をする機会を持ったりして、岩美高校独自の探究活動を創作している道半ばである。 ・GoogleClassroom内に授業情報共有スペースを設け、ワーキンググループで作成した探究学習の資料を共有することができている。 ・学校評価アンケート（７月）では「地域と連携した活動にも取り組み地域に貢献したい」と思う生徒の割合が81.9%であった。 ・学校評価アンケート（７月）では「地域と連携し、地域に貢献する活動が生徒の人間力の育成に効果を上げている」と回答する教職員の割合は94%と目標値を上回っている。	C	・ワーキンググループでの議論の内容を随時教職員と共有し、本校における探究学習の意義及び可能性に係る教職員の理解と意識高揚をさらに図る。 ・探究学習のより効果的な指導に係る教員研修を開催し、ノウハウの共有と平準化を図る。 ・探究学習をとおした生徒の自己変容の程度を確認するために、事前事後のアンケートを実施し、定性変化を追跡する。 ・学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を有効に活用し、地域住民が生徒の探究学習活動により深く関われるあり方について検討する。 ・岩美町役場や岩美町商工会、岩美町町づくりの会といった地域の団体と連携を密に情報交換や議論をしながら、お互いにとって需要と供給の形ができるように協力を求めていく。
４　業務改善	校務分掌、任務分担の見直しと長時間勤務者の解消	・時間外業務時間の年間合計が360時間を超える教職員が令和６年１月末現在で４名以下となっている。 ・前年度はできなかった場面で業務改善のためのＩＣＴの活用がなされている。 ・会議を精選し、必要な情報共有のできる場と時間を創出する。	・部活動の計画と実働の一致を促すと同時に、遠征計画は２ヶ月前に立てるように計画性を持った指導を意識づける。 ・教科や分掌でＩＣＴの活用事例の共有を進める。 ・衛生委員会での協議を継続し、改善できるものについては関係部署と相談の上、職場環境を整える。	・「授業情報共有スペース」のGoogleClassroomを立ち上げ、ＩＣＴの授業での活用事例の共有が進みつつある。 ・部活動の計画段階で時間外の指導時間を点検し、教職員への意識づけを図っているが、大会引率による時間外勤務時間が多くなる傾向がある。 ・衛生委員会での協議事項について、校内掲示板にて直ちに報告・共有するとともに、重要課題等については職員会議等を活用して教職員で共有し、業務改善についての自覚を促している。 ・職員会議を短縮し、探究学習の進め方についての情報共有の時間を確保している。	C	・月ごとに時間外勤務の多い教職員に声かけをし、可能な業務削減策について情報を収集するとともに、その情報を踏まえて衛生委員会等でより効果的な対策等について検討を進める。 ・ＩＣＴ活用の職員研修を実施し、職員の利活用スキルを向上させる。 ・振替休日の取得を促すとともに、泊を伴う生徒引率に係る変形勤務時間の設定等を積極的に講じる。

様式3

様式3